

上郡町の偉人

大鳥圭介

第三十六回「鵬程万里」中川由香

土方歳三と大鳥圭介 対照的な人物像

新選組土方歳三は多種の作品で文学的に描かれ、侍の美学を具現する人物として人気が高いです。土方は陸軍奉行並として、箱館陸軍で圭介の次席にありました。創作では圭介は土方の邪魔をする引き立て役として描かれることがあります。実際の関係性はどうかでしょう。

圭介は戊辰戦争記録「南柯紀行」で、市川の鴻之台での軍議参加者として土方の名を記します。慶応四年四月十二日、旧幕府隊は圭介を総督とし、前軍、中軍、後軍に分かれました。土方は前軍の指令官秋月登之助の参謀となり、宇都宮を攻めます。宇都宮藩は二揆で疲弊しており、攻撃を受けすぐに陥落しました。圭介は日光に向かっています。途中秋月・土方らが宇都宮城を落城させたのに驚き、宇都宮に入りました。宇都宮城内では、味方歩兵の乱暴や略奪が横行しており、圭介は困り果てます。圭介は手塩に掛けて育てた歩兵三名を泣く泣く斬首し、何とか治

安を回復しました。四月二十三日、宇都宮は新政府軍の攻撃を受けます。

土方は足指を負傷し、昼頃に途中離脱します。その後圭介は敵軍を追い返し、敵薩摩の援軍到着に苦戦します。諸隊の撤退を促しながら日暮れまで殿で指揮しました。この時の圭介の勇戦は「勇氣不撓不屈は、大鳥圭介殿一人なり」と、共に戦った桑名藩の町田老之丞が記しています。

その後土方は会津の東山温泉で療養します。圭介は敗兵を率いて日光へ入り、霧降高原の峻険な山地を餓えながら越え、会津領内で体制を立て直します。五月、六月と今市、藤原と連戦し、三ヶ月間会津国境を防衛しました。白河口が陥落する中、圭介の守る日光口は難攻不落であると、新政府軍は恐れしました。

八月、土方は戦線に復帰し、十四日に本宮を攻めます。復古記には「賊兵、本宮駅を焚掠(焼いて略奪)」とあります。圭介はただ「本宮駅焼失せり」と記します。圭介は放火を戒

め、会津藩士が船生を焼き捨てた際も「農民を虐げ人心を失う」とし罷免しました。圭介は常に狼藉を戒め民への迷惑を補償していました。宇都宮や本宮の件で、圭介は土方に思う所あつたかもしれません。

母成峠敗戦の後、土方は軍から離れ庄内藩へ援軍要請に向かいます。その間圭介は弾薬も食糧も無く、木曾、陣ヶ峰等で苦戦を続け会津を守ります。その後土方と仙台で合流し、榎本海軍と箱館へ向かいました。

箱館戦争では五稜郭奪取後、十一月に土方らが松前城を落とす際、圭介は箱館待機でした。明治二年四月に新政府軍が上陸。土方は二股峠、圭介は海岸に分かれ防戦しました。五月十一日、圭介は早朝から各戦場を駆け巡り、土方は箱館市街が攻撃されて出陣し、銃弾を受け没します。

共に旧幕軍として戦いながら、土方と圭介が共にした戦場は限定的でした。圭介は土方の三倍以上の戦闘を戦い、戦場にいた期間も長いです。

圭介は土方については事務的に名を記しているのみで、書簡の通信等は見当たりません。他の人物、例えば圭介の参謀柿澤勇記の死亡の際「士を愛

すること赤子の如く」と圭介は嘆きました。また中島三郎助などその死を詳細に語った人物は多いです。そうした特別な記述は土方には見られません。一方圭介は土方を「鬼武者」と評し、戦死の際「幕軍の驍将として会津以来私と共に幾度か死生の間に出入した土方歳三は遂に戦死を遂げた」と「老雄懐旧談」で述べました。圭介は土方に確かな連帯感を有していたと思われれます。

実際に土方は優秀な人物で、特に新選組部下からの評価が高いです。しかし、二股で連絡が無く榎本総裁を怒らせたり傲慢と評されたり、身内以外からは不評もあります。圭介も他藩から「因循」と不平を言われており、共に毀誉褒貶があります。

土方を英雄的な人物像で描く作品は数多いです。ただ商業的素材として作者の想像で魅力的に描いた像も含まれ、言動が実際の記録に無いことも多いです。他方で圭介は、功績が実質的専門的で大衆娯楽の素材になりにくく、偏見で過小評価されがちです。しかし敵味方を問わず、多くの記録から圭介の肯定的人物像が確認できます。そうした後世の表現され方も、対照的かもしれません。

まちの話題

特集

トピックス

暮らしの案内

お知らせ

イベント

スポーツニュース

鵬程万里

情報ステーション

相談窓口 新書書目表

町長コラム